Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

鴦仇摩羅 Aṅgulimāla の故事についての一考察

医学博士　藤　岡　隆　男

《鴦仇摩羅の故事概略》

『賢愚経』巻11[1]、『出曜経』巻17、[2]『増壱阿含経』巻31[3]などによると、仏陀が舎衛国の祇樹給孤独園に在した時、聡明な大臣がいて、その夫人が一人の男児を出産したという。この児を見た相師は、「この子には人並み以上特にすぐれた福徳の相があり、聡明・智弁、人にこゆる徳をもっている」と予言し、Ahiṃsaka（無悩）と名づけられた。やがてその子が長じ、大臣が聡明博達多聞広識なる一人の婆羅門につけて学問をさせたところ、彼は朝早くより夜おそくまで学業にはげみ、一日授業を受けただけで、他の幾年も学んだものに勝るほどで、久しからずして普ねく悉く精通し、師の特別の待遇を得、同僚からも畏敬されていた。然るに彼の師事するところの婆羅門は年八十を過ぎていたのに、その妻は年若く顔貌も端正で、才姿もひとにぬきんでていたという。そして彼女は無悩にひそかに想いを寄せ、それを果し得ないのを内心つねに歎き憂いていた。

ところがたまたま施主がいて、師はその弟子たちと三カ月旅行に出掛けることになり、その妻は無悩とその留守をあづかることになった。師が弟子たちと出掛けた後、彼女は美しく着飾り、媚を作って寄り添い、身悶えして彼の心を乱し動かそうとしたのであるが、無悩の意志は固く、彼女の熾然なる婬火の誘惑をあくまでも拒絶し続けた。かくして、遂にその想いがかなえられなかった彼女は強い恥辱感をいだき、愛は激しい憎しみ、怒りに変り、やがて夫が帰宅するや、苦悶の状をあらわにして、無悩に乱暴されたと訴え、夫を激怒せしめるのであります。併し、無悩の力の強いことを恐れて、密かに謀った夫は、無悩に「七日の中に千人の首を斬って、一人から一指を取り、千指をもって鬘の飾となして持て、しからば直ちに梵天に生ずるであろう」と命ずるのであります。さすがにこれを聞いて無悩は躊躇するのでありますが、師はさらに「汝はわが弟子なり。どうして私の至要の言を信じないのか。もし汝が信じないのなら義絶をするから、ここに住してはならぬ」とおどし、さらに刀を床に突き立てて呪文をかけた。ところがその時彼の心にたちまち悪心が生じ、刀を取るや外に走り出て、人を見ればただちに殺し、指を切り取って鬘となしたので、ひとびとは彼を鴦仇摩羅（オークマラ）（Aṅgulimāla. 指鬘）と名づけて恐れたという。やがて 999 人を殺害し、あと一人という時になったが、誰一人として近づくものはありません。一方七日間飲食していない彼を哀れんだその母は、食事を持って彼のところへ出掛けて行くのですが、鴦仇摩羅ははるかにそれを見、走り趣いて、その母をさえ殺そうとするのであります。時に世尊は、この状況をみて、今こそ済度すべきであると、一比丘に変身して彼に近づいて行きます。彼はこの比丘を見て、こおどりして走り趣き殺そうとするのでありますが、仏陀は彼の来るのを見ながら、徐かに歩き、捨てて去られるのであります。彼は力の限り仏陀を追って走るのでありますが、追いついたかと思うと離れ、どうしても追いつくことができなかった。疲れはてた彼が、「比丘よ、しばらく住（とど）まれ」と叫んだ時、仏陀はそれに応えて、未だ救われざる者の為に、三世を超えて濁世に留住（とど）まるみ心を諭されます。このみ心を聞き得た彼はたちまち開悟し、仏弟子の仲間に迎え入れられた彼は、遂に心垢すべて滅尽

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

して阿羅漢のさとりを得たという。

《千人殺害について》

如何に邪婬に狂うその妻の啼泣と讒訴に幻惑されたとはいっても、当時聡明博達、多聞広識を以て知られていた婆羅門の師が、鴦仇摩羅に対して「千人の人を殺せ」と命じ、また「もし汝能く母を害し、あわせて沙門瞿曇を殺せば、必ず梵天上に生ぜん」というようなことを事実云ったであろうか、私には否定こそ出来ないが、また肯定もし難い問題である。

而してこの時彼は呪文をかけられたというが、これは或は一種の暗示のようなものであろうか。催眠暗示hypnosisによって反社会的行動がつくられ得るかどうかについては、これまで Rowland や Erickson らによっていろいろ実験が試みられているが、はっきりした結論は得られていない。多くの場合は、それをやらせようとすると覚醒してしまうものだといわれているが、相手にその行動が反社会的なものではなく、むしろ好ましい行動であるというふうに信じ込ませたり、パーソナリティを変化させたりすることによっては、遂行させることもあり得るとも云われている。[4]

『提婆菩薩釈楞伽経中外道小乗涅槃論』[5]には、一切の生物も無生物も梵天の作ったものであるから、殺して梵天に供養すれば涅槃を得ることができると、吠陀（Veda）に説かれてあったことが、また『雑阿含経』巻43[6]によると、殺しても供養すればその業報をみないとする外道の教があったことが、また『成実論』巻7[7]によると、人を殺す時 Veda の語を呪せば、永遠に天に生れることのできないような罪人でも、この呪の功徳によって天に生れ変ることができるので、罪を得るどころか却って福を得るとする考えのあったことが、また『阿毘達磨順正理論』巻33[8]には、祠祀明呪を以て殺害をなすのは、良医が治療する時苦痛を与えると同様で、殺者と傍人は現証できなくとも Vedaに明記されているので、罪業を受けないと考えている外道のあったことが記されている。されば彼は、是の如き外道の教を理を尽くして説得され、遂に催眠暗示にかかってしまったものであろうか。

またここでもう一つの考え方が成り立つと思う。彼はその師の妻の讒訴によって、その師は云うまでもなく、恐らくその弟子たちからも四面楚歌となり、そしてそれを呪をかけられているかの如く感じたであろうということである。

人は集団への所属の願望が満たされてはじめて、創造的な仕事のなかで自己主張を試みるようになるが、これが障害される時には、人間の基本的要求が脅かされた時と同様に、まづ最初に不安とか怒りという感情が現われ、それを何とかせねばならぬと苦悶するのだが、もがけばもがくほど深みにはまり、自分は周囲の者のワナにはまったと感じ、人々が彼に敵意を持ち、彼を強力な力で圧迫し、彼を身動きできなくさせてしまうかのように感じるものだという。[9] これが呪文をかけられたという言葉で表現されている彼の心的状態ではなかったであろうか。

そしてこのような場合 R. Tredgold も云っているように、多くの人々は、他人との関係が破局に至るような危険をおかしてさえも、何かの目標に対して攻撃を向けると、快く感じる[9]ということも事実である。これが千人を敵にまわして戦うという攻撃的な態度に彼を走らす結果になった、とも考えられるのである。

然るにこの際、彼の行動が仲間の同情を得たり、或は他人の援助が得られたり、或は妨害が自己

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

の力でなんとか克服できる時は、建設的な努力に変るものであるという。[10]

さればここで重要なことは、その妨害を自己の力で克服しようとすることではないであろうか。利己的で野次馬的世俗の同情などあてにならぬと看破して、所謂千人の即ちあらゆる愛著を断ち切るべきであろう。

『出曜経』巻17[2]には、むしろこの愛が造悪のもとであり、また愛着の心が深固だから三界に流転し、四生の分を受け、五道に迷うのだといい、『中本起経』巻下[11]には、世間一般には楽しいものと思っている恩愛も、ただ憂悲のもととなるばかりでなく、愛すればこそたがいに憎しみ殺し合うことさえあるという。『分別縁起初勝法門経』巻上[12]にも、この愛はその自体の境界の受の中に於て能く貪味繋縛の業を作り、能く発起諸取の業を作り、能く先に引くところの行等をして有業を成ぜしめ、能く死後続生の業を作るが故に集諦となすとある。されば『出曜経』巻30[13]には、人能く愛を今世にも後世にも断じ尽くしてこそ梵志（愚悪の法を滅し、煩悩を滅尽した清浄なる人、得道者）[14),15),16)]であるという。

されば『出曜経』巻21[13]には、一坐、一臥にも、独歩して伴無く、当に自ら降伏して、ひとり山林を楽しむべしといい、この人は諸天、世人のために承事供養せられ、八部鬼神ときに随って擁護し、仏世尊のために歎誉せられ、天雷地動の如き大衆の中に入っても、意空無の如く錯乱しないという。

C.E.Moustakas[17]も、他人からの、自然からの自己分離から孤独不安におち入った者が、それから逃れようとして、自分の個性を捨てて服従しようとする者は、結局それに耐えられず、敵意や反抗心を生じ、それが一層不安感を強め、この不安感、孤立感、絶望感をおおい隠そうとして、攻撃的行動をとるようになるが、もし彼が自分の真実の孤独に身をゆだねることさえできたら、その人は事実あるがままの自分自身に到達し、心の声を聞き、不思議な新しい確信を得、自分の道を行く確固とした決心が生れ、ひとりで立つ勇気を得、彼自身を実現し、他人との本源的なかかわりあいを持つ感覚と絆を創造する新しい人となって出現することができるであろうと云っている。また M.Buber[18]も、この孤独を通してこそ、自分自身とまじわり、言葉では云い尽くせない神秘との交わりができるばかりでなく、悟道に入ってもはやこの世のすべてに執着しなくなったものだけが、絶対者と相対することができるのでないだろうかと云っている。

また**母を殺害すべし**ということについてであるが、『阿毘達磨大毘婆沙論』巻198[19]には、これは見集所断ではあるが、父母は自らの性愛をむさぼることによって子が生れたのであって、父母は子どものためを思って産んだのでもないので、親には恩はないとする謗因邪見の外道のあったことが記されてある。されば、彼はこのような言葉で洗脳されたものでもあろうか。

古来洋の東西を問わず母性愛が女性の本能として考えられてきた一つの理由としては、動物の雌が子どもを生んだ後の行動から類推され、それが人間の母親にも同様のエピソードがあることと結びついて共感を招いたものであろう。併し最近の研究によって、この動物の雌親の行動は愛情からではなく、出産後のホルモンの作用によるもので、これは母性行動maternal behavior ではあっても、母性愛mother's loveの表現ではないと云われるにいたった。[20]

また会田雄次[21]は、焼野で雉の親鳥が、その上に覆いかぶさって雛をまもり、自分が焼け死ぬのも、そしてまた雷鳥が暴露された雪渓にとび出して、鷹や鷲の餌食になり、その巣にいる雛を守るのも、これは自己犠牲の本能ではないといい、子どもをかかえている時、絶対的な危機に直面する

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

と、気が転倒して行動不能になる、つまり腰が抜けてしまうのだと酷評している。

それに対して人間の母親は、自分が死ぬまで母親としての意識を持ち続けるものであり、離れていても子どもを思い続けるその情は、よく詩歌にも詠まれてきたところである。併し文化人類学者のM.Meadは、ニューギニアの東方にあるマヌス島における男の子に人形遊びが多かったことに着目して、人間の母性本能または育児本能と考えられているものが、実は社会的・文化的に規定される面の大きいことを指摘しているのである。[20]

従って、母性愛なるものを否定する訳ではないが、それが本能的なものであると考えるのは顚倒の妄想であって、われわれの社会に於ける母親の母性行動も、その文化社会の影響を強く受け、教育によって形成されるものであることがわかるであろう。

されば自己中心的な母は、時には息子を独占し、繋縛しておき度いという心を持っており、時には子どもの存在を否定し、犠牲にしてしまうものであるという。

『日本霊異記』[22]には、邪婬に狂って乳を与えず、その子を棄てて飢えしめた女ざかりの母が、あの世で乳房を脹らし、膿汁を垂らして痛み苦しむ話があり、『今昔物語』巻27[23]には、老母が鬼になってわが子を食い殺そうとした話が載っていて、私も老母の孤独不安が鬼の心になってわが子を悲痛せしめている例をしばしばみている。また同物語巻29[24]には、子どもを犠牲にして操を守った母の話がある。また『宇治拾遺物語』[25]には、昔、遣唐使が中国で妻を娶り子を生ませた後、必ず迎えに来ることを約して帰国したが、その後全く音信のないのを非常に怒り怨んだ母親が、その子の首に「遣唐使それがしが子」という札をつけ、「宿世あらば親子の中に行合なん」といって海に投げ入れたという話がある。

『百喩経』巻1[26]には、自分の名声を高めるために、自分の予言した日にその子を殺した愚かな父親の話があり、また『雑宝蔵経』巻2[27]と、『撰集百縁経』巻4[28]には、梵摩達王が多くの婇女を率いて園遊した後、飲残の酒をその夫人不善意に与えたところ、怒りに狂った夫人が、子が泣いて哀願するのも聞かず、一子法護の咽を刺し血を飲ましめたという話がある。また『撰集百縁経』巻5[28]には、夫人との間に子のなかった長者が、同族の家の女を娶り、間もなくこの女が懐妊したが、第一夫人はそれを嫉妬し、ひそかに毒薬を飲ませて流産せしめたが、そのことについて詰問され、「若し私がやったのなら、死んで餓鬼となり、産んだわが子を噉いまくってやる」と誓い、その報いを受けて餓鬼道に堕ち、産んだわが子を次々と食い殺したという女の話がある。

またギリシャ神話によると、Medeiaはギリシャの英雄イアーソーンと結婚して、二人の男子をもうけ、種々のいきさつがあって夫妻はコリントに逃れたが、そこで夫はMedeiaを裏り、コリント王クレオーンの娘で花のようなグラウケーと結婚してしまったという。怒りに狂ったMedeiaは、まずグラウケー父娘を毒殺し、続いて二人のいたいけない実子を殺してしまうのである。[29]

而してこの母親が夫への復讐から実子を殺害しようとする願望について、F.WittelsやE.S.SternがMedeia complexと名付けたが、この願望・心理は、またあらゆる女性、さらには男性にも共通の潜在的心理であろうと云われている。[30]

また最近も実子殺しの記事を多くみる[31]ことであるが、このMedeia complexなるものは、古今洋の東西を問わず、宿命的なものであろうか。

『仏説大乗戒経』[32]には、女人は信無し、親しみ近づくべからずといい、『宝積経』巻44[33]には、女であることに於ては母も同じで、よく女の幻誑の術を身につけていて、男子の大志を摧くことが

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

あるので、その恩愛に溺れるべきでないといましめている。

ただここで弁解がましくなるが、これを以て仏教が女性を侮辱していると受けとるべきではない。『無所有菩薩経』巻1[34]や『智度論』巻20[35]には、諸法本来空なるものであるから、本質的には男女の区別はなく、若しあるとすればそれは相だけであると説いている。

またジョンズ・ホプキンス大学のJ.Money[36]は、性的identityは遺伝的に確定されるものではなく、発育の過程で個々のpersonalityが男女いずれかのstereotypeに形成されていくいづれの発育過程に於ても、天性natureのプログラムを育ちnurtureが逆転し、男性から女性へ、また女性から男性へ変えることができるといい、その証拠としてTurner症候群を挙げ、本質的には男女の区別のないことを説明している。

而して『中本起経』巻上[37]には、無明の識より父母に愛着して憂悲の心を生じて五道に迷うことを戒め、『廻諍論』巻4[38]には、親子の関係について、能生・所生の感情を離れてこそ五道を出で、安らぎが得られるという。

さればといって、仏教は外道の云うように父無し、母無しとの邪見に執しているのでないことは勿論で、『本事経』巻4[39]には、一は父を肩荷し、一は母を肩担してその寿量の尽きるまでかって暫くも捨つること無く、衣食を供給し、病には医薬せんとも、種々の所須はなお未だ父母の恩に報ゆること能わざるが如しといい、『大乗本生心地観経』巻2[40]には、父母を饒益するものを尊貴天人の種類と名け、或はこれは衆生を済度せんがための菩薩の仮りの姿であるとさえ云っているのである。

而して『雑阿含経』巻28[41]には、子どもには三種あって、父母と同じようによく戒律を守る随生子、父母は戒律を受けもせず守りもしないのに、子どもはよく戒を受けそれを守っている勝生子と、父母はよく戒を受けそれを守っているのに、子はそれを受けもせず守りもしない下生子とであるといい、随生子と勝生子を願う親はあっても、下生子をもとめる親はいない筈であるという。『雑宝蔵経』巻7[42]にも、互に怨み合い損い合っていた二人の子が、仏陀の法を聞いて阿羅漢道を得たことを聞いた父親が、歓喜し、遂にはその父親も仏の説法を聞いて聖道を得たとある。

さればその親の愛に溺れることなく、その真実の願にかなう人となってはじめて、真に孝養を尽くすことになろう。

然るにまた『大乗本生心地観経』巻2[40]には、一切の衆生は無明の故にそれを知らないのだが、流転輪廻の生を重ねていた間に、互いに父となり母となっていたのであり、されば一切の男子は即ち慈父であり、一切の女人は即ち慈母であって、現在の父母の恩と等しく差別はないという。一切の有情が世々生々の父母兄弟であってみれば、わが父、わが母というこの「わが」と限定した考え方は、すでに成り立たないであろう。

而して『宝積経』巻105[43]には、汝恩に報ずることなかれといい、その理由として、正行をたもっている善男子は、一切の法は皆平等で、能作・所作のないことを信じているので、報恩をも念じているとは云わないのだという。

されば『流転三界偈』[44]にも、ただ流転三界中の恩愛を断って無為涅槃に入るべきであるとすすめ、而してこのことこそが真実報恩の道であると説かれてある。

親鸞聖人も、父母孝養のためと思って念仏したことは未だかって一度もないといい、ただ自力（報恩）の思いをすてていそぎ浄土（無生の生）のさとりをひらくことが、有縁のものの済度にもなる

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

のだと仰せられている。[45]

また**沙門瞿曇を殺せ**という教えについてであるが、『阿毘達磨大毘婆沙論』巻198[19]には、当時、聖者の形貌、飲食の余の有情と変りないことに執わって、権威を否定して、世間に阿羅漢無し、或は正至（涅槃）無しとする謗道邪見、謗滅邪見の外道のあったことが記されている。されば彼の婆羅門も鴦仇摩羅にかかることを教えて、そそのかしたものであろうか。

而して『弘道広顕三昧経』巻2[46]には、六波羅蜜の行も必要ではなく、仏陀世尊も問題ではなく、諸法の空無我を解することが要であり、善悪にわざわされず、また罪報にも執わるなといい、唐代の丹霞禅師が京洛の恵林寺を訪れ、本尊の仏像を取りおろして焚火をし、煖を取ったという話は有名である。

また『正法眼蔵』[47]には、夾山禅師が「生死のなかに仏あれば、生死なし」と云ったに対して、定山禅師は「生死のなかに仏なければ生死にまどわず」と云ったことが載せてある。夾山は定山の言葉尻に執わって、師の法常禅師に執擁にその是非を求めたところ、「親しきものは問わず、問うものは疎きなり」と一喝されたという。夾山にはまだ一抹の仏執が残っていたのではないであろうか。[48]

さればといって仏教では空・無我をさとらしめんとしてこのように説いているのであって、外道の邪執見とは根本的に違うものであることを銘記すべきである。

鴦仇摩羅は千人殺せと云われ999人までは殺し得た。併しもう一人が仲々殺し得なかった。仏執をも、そして母に対する愛着をも断ち切ることができなかった。彼は或は無意識的にもせよ、あてにもならぬあらゆる外物に対する執着の心を断ち切って、真の安らぎを求めていたのかも知れない。併し、彼の断ち切るべき最后の一人は、自分自身であり、その我執、我見であることを知らなかったのであろうか。

『出曜経』巻21[13]にも、一人にして千に勝つもなお生死に在って八難を受けねばならぬから健夫ではなく、自らを伏するものこそ真の勝利者であるという。また『雑阿含経』巻4[49]には、凡夫は愚痴無聞で慧無く明無く、徒らに我見を生じて心を繫着せしめて貪慾を生ずるから、苦悩するのだといい、『宝積経』巻105[43]にも、「汝当に善く知って、我想及び衆生想を殺害すべく、是れを真に一切の衆生を殺すと名く。是くの如くならば、吾れ当に汝に梵行を許すべし」といい、殺を行う時に当っては、然も亦執持の想および害の想をさえもつなという。また『生経』巻4[50]によると、本来無一物の道理を解することなく、妻子眷属をあてにするから裏切られて、こんなことなら一人身であればよかったと、苦悩を深めるのだが、同様にわが身をたのみとするから、それを構成している五陰に苦しみ、六衰の惑を生じ、迷を繰返すのであるが、三界は一切皆空なりと解することによってのみ、わが身に対する愛執をも滅して、無上正真の道に到るといい、また『雑阿含経』巻48[51]には、一切の衆生は、その邪慢を余無く永滅せば、長夜に安穏快楽なりという。

J.Bowlby[52]も、人格の発達とは、われわれのまわりの直接的環境やその他の圧力が次第に力を失い、徐々に自己の目的を追求し、自分自身の環境を選択し創造していく一つの過程で、これをGoldsteinやScheererはabstract attitude抽象的態度と呼んでいるが、これが形成されることにによってわれわれは瞬間的慾望を抑制して、究極的に自己の基本的要求を満たすことができるよう

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

になり、この過程を経てわれわれは本能の奴隷から解放され、pleasure principle 快楽の原理を克服し、現実の要求に適合できるような精神的機能を獲得するのであるといっている。

而して、ここで「われわれのまわりの直接的環境やその他の圧力が次第に力を失う」ということは、千人に対する、即ちあらゆる愛着が、そしてわれわれを萎縮せしめていたあらゆる権威が問題にならなくなることを、そして抽象的態度とは、結局、我執我見が滅して無我になることを意味してはいないであろうか。

《母殺しの大罪》

仏陀はその母を殺害しようとしている鴦仇摩羅をはるかに見、今こそ済度すべきを知り、化して一比丘となって彼の近くに行かれるのでありますが、釈尊は、多くの人々が彼によって残忍にも殺戮されるのを見ながら、何故に彼が母を殺そうとするまでは、その前に現われなかったのであろうか。

その理由の一つとして、母殺しは五逆罪の一つであり、若し犯せば、救われようもない大罪となるからでもあろうか。

『涅槃経』巻23[53]には、梅陀羅と卑しめられる者でさえ、婦女子は殺害しないという。『福蓋正行所集経』巻5[54]には、この世の如何なる善根功徳も、殺母の罪を消すことはできないことが説かれてあり、また『四分律』巻35[55]や、『十誦律』巻21[56]や、『根本説一切有部毘奈耶出家事』巻4[57]などには、母を殺害した者は善法を乱すから出家させないといい、また母を殺したことを聞かずに出家させた者は、越法罪を得るであろうといましめている。

また『古事記』上巻[58]には、伊邪那美神が火の神を生んだために死亡したので、伊邪那岐命は剣でその子火の神を斬ったとあり、これについて犯罪精神医学の稲村博[59]は、母が死んだのは火の神の意志ではないであろうが、母親を死なせるような邪悪なものは滅すべしとの精神であろうと推論している。

然るに『尊・婆須蜜菩薩所集論』巻8[60]には、父母を殺しても、時にその罪の報を受けないことがあるといい、それは不成男で、愚かであって、親に慈恩を感じていないので、殺してもその罪を悔いて何時までも悩むことがないからだといい、また畜生も尊卑の念がないので、五逆罪の報を受けないという。

されば非道にも母を殺せば、出離の縁なき五逆の罪人となるは必定。また若し殺して苦悩を生じなければ、不成男よ畜生よとさげすまれ、永遠に善い仲間を失うことになるであろう。

ことに『大乗本生心地観経』巻2[61]には、父に慈恩あり、母に悲恩ありとしながらも、母の悲恩はもし我れ世に一劫の間住して説いても説き尽すことは不可能であるといい、まことに長養の恩は天にあまねく、憐愍の徳は広大にして比べものが無く、世間で高いといえば山岳より高いものは無いが、悲母の恩は須弥山よりもはるかに高く、世間の重大なるは地を先となすが、悲母の恩はまた彼に過ぎているという。また母の十徳を数え「一には大地と名づく。母胎中に於て所依となるが故に。二には能生と名づく。衆苦を経歴して、而も能く生むが故に。三には能正と名づく。つねに母手を以て五根を理(おさ)むるが故に。四には養育と名づく。四時の宜しきに随いて能く長養するが故に。五には智者と名づく。能く方便を以て智慧を生ずるが故に。六には荘厳と名づく。妙なる瑛珞を以

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

て而も厳飾するが故に。七には安隠と名づく。母の懐抱を以て止息となすが故に。八には教授と名づく。善巧方便して子を導引するが故に。九には教誡と名づく。善き言辞を以て衆悪を離るるが故に。十には与業と名づく。能く家業を以て子に付属するが故に」と。されば「悲母の堂に在す、之を名けて富むとなし、悲母の在さざる、之を名けて貧しとなす。悲母の在す時、名けて日中となし、悲母死する時、名けて日没となす」といい、父母に孝養することは、仏を供養すると同じ福徳になるであろうという。

而して父殺しについては、『涅槃経』加葉品[62]には、劫初より已来、国位を貪るが故にその父を殺害せる悪王が一万八千もあったとあり、アジャセが父王を殺害したことはあまりにも有名である。また『宇治拾遺物語』[63]にも、鯰がかっての父であることを知りながら、殺して食ったという話がある。また『法句譬喩経』巻4[64]には、愚痴の故に宿命を識らず、前生に於ては父であった鶏を殺して食い、かつての怨である子を養い、恩愛深固なるが故に、前生には母であった女を妻となす譬がある。

これと同じような話が、ギリシャ神話にあるエディプスの物語[65]である。テーバイの王ライオスは、或る神託によって、今度生れた息子をそのまま成長させるならば、王位と生命に危険があると予言され、彼は生れた子どもを一人の牧者に頼んで殺させようとした。ところがその子は或る百姓の主人夫婦に助けられ、エディプスと名づけられて、養育された。後、王はただ一人の従者を連れて旅行中、馬車を駆って来る一人の青年に出逢い、些細なことで争いとなり、王の従者が青年の馬を殺してしまった。それに立腹した青年は、王と従者とを殺してしまった。而してこの青年こそエディプスであったのである。この出来事があって後まもなく、テーバイの町にスピンクスと呼ばれる怪物が現われ、岩の上から通りがかりの旅人に謎をかけ、解くことの出来ない者達が皆殺されてしまったという。エディプスは大胆にも自分からスピンクスの謎に挑戦し、負けたスピンクスはそれを不面目に思い、岩から身を投げて死んだ。テーバイの人民は大層よろこんで、彼を王として迎え、女王イオカステを娶らせた。かくて彼は知らずに父を殺し、今また実の母の良人となったのである。後、このことを知り、イオカステは自殺し、エディプスは気ちがいになって自分の目をえぐり抜いてテーバイの地をさまよい、悲惨な生涯を終ったという。

子どもが自分の性器に心をうばわれる3～4歳より5～6歳までを phallic phase といい、この時期に異性の親に対して性愛願望が強くなり、男児の場合、自分を父親と同一視し、恋敵である父親を嫉妬し、憎しみをいだくようにさえなる。この現象をギリシャ神話の故事に名をかりてOedipus complex（エディプス心症）とよんでいる。

またこのような心症は、何も男の子に限った問題ではなく、『宝積経』巻55[66]には、謂わゆる父母の和合する時、若し是れ男ならば母に愛を、父に瞋を、若し女ならば父に愛を、母に瞋を起さなければ、受胎しないという。また『分別功徳論』巻2[67]にも同様のことが説かれている。

この女児が父に於て愛を生じ、母に於て瞋を生ずる心症を、Elektra complex（エレクトラ心症）と呼んでいるが、このエレクトラとは、ギリシャ神話中の女性の名であり、ミュケナイの王アガメムノンと王妃クリュタイムネストラとの間の子で、オレステスの姉でもある。母が姦夫アイギストスと共謀し、トロイエーより凱旋せる父を殺し、オレステスをも亡きものにせんとした時、秘かに老僕をしてこの幼児をポーキスの王の許へ伴れ去らしめた。オレステス長じて父の仇を討たんとし

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

てミュケナイへ来た時、エレクトラは彼と謀し合わせ、母とアイギストスを討たしめた。父亡き後、彼女一人母の許にあってひどい虐待を受けていたので、そのよろこびは非常なものであったという。[65),68)]

以上によっても知られるごとく、何故かOedipus complexやElektra complexなるものは、古今、洋の東西を問わず、宿命的なものとして認められるのである。されば男の子が父を殺すということは、勿論許さるべきことではないのだが、時には理由のないことではないのかも知れない。然るに鴦仇摩羅には、その母に対してこのような心症は、本来存在しないのであるから、母殺しということは理由なく、弁解の余地すら無いことになるであろう。されば釈尊は、その大罪を犯させまいとして、彼の前に立ち塞がれたのではないであろうか。

《宿　　業》

而してここで、もう一つの疑問がある。鴦仇摩羅が999人という大量の殺戮をしていた時、何故仏陀はそれを止めなかったのであろうか。現実の母ばかりではなく、一切の人々は世々生々の父母兄弟であってみれば、肯づき難い問題である。

それについては、宿業によっては殺し手にまわり、時には殺され手にまわることもあるからでもあり、或はそれはどうすることもできないものなのかも知れない。

されば『成実論』巻1[69)]には、衆生が業報のために障害されて解脱を得ざる時は、仏は能くその業報を尽くさしめ、信等の根の熟するを知って、然る後に法を説くという。

『賢愚経』巻11[1)]によると、鴦仇摩羅は前生に於て不意の襲撃を受け、誓って当来の世に、汝或はその愛するところの妻子を殺すであろうと怨んで死につくのであるが、その時襲撃した者たちとは、今彼に殺された者たちであると説いている。されば加害者となるのも、また被害者となるのも、宿世の業報によるものであろうか。

而してこの考えは、Von Hentig, Ellenberger, Bender, Mendelsohn らの所謂被害者学 Victimologie[70)]の先駆といってよいのではないか。

『出曜経』巻23[71)]や『十地経論』巻11[72)]には、いかなる苦悩の人生も、みなわが身の先世以来の積悪によって起ったものであるといい、『賢愚経』巻9[73)]や『六度集経』巻6[74)]や『因果経』[75)]などには、宿したその子の業によって、母親の性格や行動までがその影響を強く受けることがあると説かれている。また『中本起経』巻上[37)]には、その子の罪福は自らの宿業によって生ずるもので、父母などの他の縁によって生ずるものではないといい、『本事経』巻1[76)]や『六趣輪廻経』[77)]や『智度論』巻24[78)]などには、現在の過まれる業によっては、さらに未来輪廻を繰返して安らぎを得ることがないという。而して『般若燈論』巻15[79)]や『十地経論』巻8[80)]には、結局これもわが身の無明によるもので、愚痴に盲いられて我に貪着し、業の地に苦悩の種子を宿し、愛執の水で潤おしてその芽を益々増長せしめるのだという。

而して『阿毘達磨蔵顕宗論』巻14[81)]には、現在の果報をみれば過去の自業は信知できる筈だといい、宿業を信知し、善悪すべてをその業報にまかせること以外に、その苦悩からの解放はないのだが、『大方等大集経』巻3[82)]には、それをよく知るものは如来のみであり、あらゆる衆生はそれを知らず、また信じようともしないという。

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

だから苦難に遇うと、それが突然襲ってきたかの如く思って、愚痴に泣き、反社会的な行動にも出るのである。

然るに、如来智の所照において自己の宿業が深く信知せられ、それに随順する時、他に責めを負わせる何ものもなくなり、他に執わっていた我執、はからいの心も消滅するので、却ってその繋縛から解放されるのである。

親鸞聖人も、「卯の毛、羊の毛の先にいるちりばかりも、つくる罪の宿業にあらずということなしと知るべし」と仰せられ、されば「よきことも、あしきことも業報にさしまかせて、ひとへに本願をたのみまいらすべし」[83]とすすめられるのであります。

M.Buber[18]も、自由人とはその運命との出会いに身をまかせる人のことで、きびしい運命との出会いに身をまかせてこそ、運命そのものがやがて光明に変るものであるが、自我の強い人はこの出会いに適していないという。ここで出会いに身をまかせるとは、業報にさしまかせること。自我の強い人とは我執の強い人、自力作善の人のことであろう。

一般には、人間の行動には、常にその人の生活史が背後にかくれているもので、これをよく知ることが、殊に精神的疾病の再発予防にもつながると云われている。[84]然れば、宿業を重視して説くのも、現実の苦悩から救い、かつは再び迷いの世界に輪廻させまいとの、仏陀のみ心からでもあろうか。

人のこの世に於ける行動は、先天的遺伝的なものもあろうが、環境に著しく影響されると考えられている。すなわちドイツではFreudが、アメリカではMeyerが、現在のその人の異常行動の原因を、その人の過去の出来事や経験の中に求めようとし、かくて精神や行動の異常は、その人の環境に対する生活反応が長い間積み重ねられた結果生じた人格障害に起因するものであり、それは当然小児期までさかのぼって考えられねばならぬと見なされるようになった。またW.Healyらは非行少年の家庭環境にはいろいろと問題があって、それが非行へ追いやっていることを認めている。殊に出生直後の愛情飢餓状態が、その子の将来に影響を及ぼすこと大であるという。[85] Leo Kannerによると、親の養育態度がその子どもの人格の発達を左右すると云っている。Ferenczi は歓迎されない赤ん坊は望まれて生れた赤ん坊にみられるような生活と成長に対する意慾が少ないと云っているし、Bender は、早期の愛情欠乏によって生じた性格や行動の変化と、器質性の脳損傷によって生じたそれらの変化とが非常によく似ていることを指摘している。[86] また児童精神科医のGilbert Kliman も、所謂小児の微細脳障害 minimal brain dysfunction syndrome が、その子の乳児期における母親のうつ状態から生ずるのではないかと推論している。[87]

而して生後の子どもに及ぼす諸因子については色々と考究されてはいるが、それはさらに胎児期までさかのぼって考えられねばならないであろう。L.W.Sontag, N.Fries, T.Benedek[88]や M.Boss[89]は、胎児はすでに原始的な情動感受性をもつと考え、その胎児をとりまく環境因子の一に母親の情動を考えている。前漢の劉向は『烈女伝』で胎教を説き、わが国では元禄3年稲生正治が『蠡斯草(いなごぐさ)』でこれを論じて以来、民衆にひろく信ぜられてきた。

而して『過去現在因果経』[75]には、出家した太子が従者を帰すとき持ち帰らしたその荘身具を見て悶絶して地にたおれたその妃ヤソダラに、父王は人を遣わして、「自ら愛敬せしめて、胎児をして安穏ならざらしむるなかれ」と慰めているので、当時から胎教は印度の民衆に信ぜられていたのではあるまいか。また『大方等大集経』巻32[90]には、妊婦が三宝に帰依すると、心身共に健全で、人

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

に尊敬される子が生れることが説かれている。また『宝積経』巻55[91]には、人は自分の業だけで生ずるのではなく、父母の縁などの和合力によって生ずるのだとあり、仏教に於ても、父母の影響力並に胎内環境（胎教）の影響力をも認めているのである。

然れば、ここで論ぜられる宿業とは、所謂客観的事実ではなくて、如来智の所照に遇ったものの、いわば普遍的な主観的事実ということであろうか。それでもなお宿業を説くのは、これを信知すること以外に、現在の苦悩よりの解放がないからではあるまいか。

《神　　通》

『仏説華手経』巻10[92]には、如何に善好の言ありと雖も、時を得なければ受けずとあり、然れば仏陀はまたこの時を待っていられたのでもあろうか。

彼が罪なきその母を、そして七日間飲食していないわが子を哀れんで食事を運ぶその母を殺そうとした時には、如何に邪教に狂っていたとはいえ、心の動揺を感じなかったであろうか。ましてその時その母はひどく狼狽し、彼を恐れ、怨み、怒り、罵っているのです。まして『大乗本生心地観経』巻２[40]には、恩に背いて順わずに父母に怨念の心を生ぜしめ、母悪言を発せば、子はたちまち三悪道に堕ち、一切の如来、金剛天等及び五通仙も救護すること能わずという。されば今、彼の心に救われ難き苦悩を生じて、大いに動揺したことであろう。そこにつけ入ることのできる間隙が生じたのではないであろうか。そしてさらにそれにゆさぶりをかけたのが、仏の神通力であろう。

『瑜伽師地論』巻37[93]に、諸仏・菩薩の神通を説き、震動とは定自在によって普ねく能く無量無数の三千大千世界をば皆能く震動することであるといい、所作自在の神通とは、普ねく一切の諸有情をして、往来・住の所作を自在ならしめることで、これらの神通によって能くその自性を転成するものであるという。而して『大般若波羅蜜多経』巻１[94]には、この震動によって、一切の有情は皆苦難の生を離れ、宿住を憶い、歓喜踊躍し、安適を得、十善業道を修し、身意泰然として忽ち妙楽を生じ、諸の有情に慈悲喜捨の心を発すという。

考えてみると、鴦仇摩羅が愛に迷い、多くの人々を殺害し、今母を殺さんとしたのも、いや人生の出来事すべては、この震動に遇っていたのであり、所謂“ご催促”にあづかっていたのではないであろうか。

人間自分のしていることに自信を無くし始めた時が、一番つけ入れられる間隙の出来る時であるが、それでもまだ肯定的な自我が根強く残っているものである。催眠療法でも一回の誘導であまり効果のない時は、Vogt によって考案された fractionation method “ゆさぶり法”[4] というのを行うことがあるが、仏陀は彼の固執している既成概念にゆさぶり、震動の神通をかけ、それを崩壊せしめ、解脱を得しめようとされたことであろう。

それまでの彼は、当時の婆羅門の教によって得た既成概念に固執していたのではないであろうか。すなわち『仏性論』巻１[95]には、当時、火は水にならぬように、すべてのものには自性があり、修行してもそれによって自性は変らないのだから、その要もないとする我の見解に固執する外道のあったことが記されている。

彼も恐らくこのような見解に惑わされて、如何に悔い改めても、過去に犯したその悪業の報いは受けねばならぬと、我の見に固執していたことであろう。されば仏陀は、『僧伽羅刹所集経』巻下[96]

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

にもあるように、汝は悪のもとである過まれる見解に惑着、固執しているから、安住を得ることができないのだ、とさとされ、『増壱阿含経』巻31[3]によってもうかがい知られるように、仏陀は彼に、この我見を断ずる法を説かれたことであろう。

『観普賢菩薩行法経』[97]や『大般若波羅蜜多経』巻387[98]には、諸法は皆本性空であって実事は無いのだが、ひとは惑着の故に顚倒の妄想をおこして苦しむのであり、このことをさとって心がおのづから空となれば、謂ゆる善悪の分別をおこして苦しむこともなく、分別が無くなれば罪福も主なきことをさとって、それに惑着することもなくなると説かれている。また『般若灯論』巻11[99]や『大乗広百論釈論』巻4[100]には、一刹那も時はとどまらず速かに滅するので、時はあることがなく、従って現在は過去の影響を決定的に受けるということはなく、また過去とはすでに滅したものであるから、その過去にこだわるべきでないという。

また『大日経』[101]には、時ありと執する時外道のあったことが記されてあり、彼等はすべては時から生じたものであるから、すべてはまた時が解決すると考えていた。また同経疏第一によると、その外道の偈に、時来レバ衆生熟シ、時至レバ則チ催促ス、時ハ能ク人ヲ覚悟セシム、是ノ故ニ時ヲ因トナスとある。時がすべてを解決してくれるのだというと、執着の心が無くなったようにも思えるのだが、これはまだ時に執わっているのである。仏陀は、その時は仮立のもので、事実存在するものでは無く、時の自性は空であると説いているのである。

また『仏説内蔵百宝経』[102]や『坐禅三昧経』巻下[103]や『大般若波羅蜜多経』巻4[104]などには、仏が三世を説き、因縁を説くのは、世俗の習慣に随ったまでで、心が住すれば、それらは空・無主・無我であることが理解できようとあり、『般若燈論』巻12[99]には、因果は無自性ではあるが、それでも仏教が因縁を説くのは、第一義に趣かしめんがための方便門であると解すべきであるという。

また『因果経』[75]にも、我々の感覚器官である根と、その対象物である境と、それを知覚する心である識とが合して、虚妄に分別するので、その果報を受けるのであるが、一切諸法の本は、因縁より生じて主無しといい、若し能く此を解せば、即ち真実の道を得るであろうという。

また『大方広如来秘密蔵経』巻下[105]には、たとえば毒を服してもいないのに、毒をのんだと思い込んで苦悶しているものがあれば、良医はそれをよく知って、薬ならざる薬を用いて治療するように、不実の煩悩に悩んでいる凡夫には、如来は不実の法、因縁和合を説くこともあるが、これは勿論その実体があるのではなくて、第一義に趣かしめんがための不実の方便であって、一切は皆空であるという。

而して『大乗広百論釈論』巻5[100]には、だからといって、邪見で世俗の説を否定していっているのではなく、ただ世俗では如何に真実だからといっても、それに執わると邪見に陥ることを云っているまでであるという。

而して『宝積経』巻87[106]にも、我・我所の想に執着が無くなれば、心住まって仏法を得ることができるのだが、一切世間の人は徒らに執着の心をおこし、執着すべきでないと云われると、却って大いに驚き怖れ、信じようともしないという。また『修行道地経』巻4[107]にも、この空・無我の理をさとれば、心住まるが、我の想に執わってこの理を解することができないと、樹が風に飜弄されるように、心が動揺して安らぎを得ることがないという。

仏陀のこのような空・無我の教えは、それまでの世俗の既成概念にこだわっていた鳶仇摩羅にとっては、大きな驚きであり、されば益々その心を大きく震動せしめられたことでありましょう。

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

人は何故か、それが仮りのものであれ、邪なものであれ、何かに執わってでもいないと不安なのでしょうか。

『大乗広百論釈論』巻3[108]には、諸行は無常であり、空・無我ならば、すべてのものは断滅するであろうとする外道が、また同論巻10[108]には、諸法は空・無我と云えば、無の見に堕してしまうだろうとする外道のあったことが説かれている。

恐らく鴦仇摩羅も、仏陀の空・無我の教えに驚き怖れて、或は外道の陥り易いかかる邪見に執わり、安らぎを得なかったことであろう。

もともと聡明な彼は、真剣にその教えを聞いたに違いない。『出曜経』巻17[2]にも、奔馬の馳趣にも及んで仏に向うとあり、また声をあげて沙門に喚んで白く、「止まれ、止まれ、沙門よ。吾れ義を問わんと欲す」とあることでも肯づかれよう。

さればまた仏陀は、無我を説いて、彼の心に二重、三重の震動をかけたことであろう。

『大乗本生心地観経』巻4[109]には、凡俗の者は妄想によって分別するので我執をおこすのであるが、少しく聞くと、聞いたでまた法執をおこして、生死に輪廻してとどまることがないといい、『般若燈論』巻14[110]にも、空といえば空に執し、無常といえば無常に執するが、これも顚倒の妄執であるといましめている。

また『優婆塞戒経』巻6[111]にも、時はあることがないから殺も成立しないと執するものがあれば、仏は世俗に随って、能く未来を遮するが故に、殺と名づくるを得とも説くことがあるという。

また『大乗広百論釈論』巻6[100]にも、聖意が空の理を説くのは、一切虚妄の執着を除くためのものであって、もし諸法は空なりと執する者があれば、時に諸法は有なりと説くこともあるのであり、それは、我の見解は正しい道理にはかなっていなくとも、むしろ彼の犯す過失は軽く、ただ涅槃に背くだけで、世俗の善根をあえて断滅しようとはしないといい、然るに悪しく空見を取りちがえる邪見のものは、世俗の善根をも断滅し、ひとびとをも損ね、ただ涅槃に背くだけではなく、また自身をも地獄の火の中へ投じて、その火をますます盛んにするであろうという。

経[3]には、彼が仏との地を頓縮すれば寛舒し、是の如くこれを繰返して、彼を疲極せしめて、仏に及ぶ能わざらしむとあり、これは彼が自己流に了解できた、すなわち追いついたと思うその法執或は悪趣空の邪見に対して、かかる説法、すなわち所作自在の神通を現わされたものではあるまいか。

また『宝積経』巻4[112]には、「一切の諸法を如来は悉く知って、縁起門を以て開示宣説するに、是の如き縁起は虚妄不実にして、自性本来皆悉く空寂なれば、是の縁起の性も亦真実に非ず、能く衆生をして離染清浄ならしむれども、十方に求めて皆得べからず、得る所無きが故に摂受ある無く、摂受無きが故に、我が所説に於てもなお応に捨離すべし」とあり、ここで仏陀はそれまで説いた言説をさえ捨離して、如何なるものにも執着すべきでないことをさとされたことでありましょう。

而して、愚悪にして誤解する者の多い世俗に於て、何故に空無我の理を説かねばならぬのであろうか。それについて『大乗広百論釈論』巻6[103]には、この理をさとることによって、如何なることにも泰然たるを得るからだといい、また同論巻10[96]には、その所応に随って等正覚を証し、自利利他の功徳無尽となるからだという。

また G.W.Allport[113]も、人はより善に近づこうとして葛藤し苦しむことがあるが、この苦しみは、結局自分自身の存在の場を、よりよく維持してゆき度いという我愛、我執でしかなく、全体と

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

して健全な生活は、このような努力によって得られるものではなく、無我を目標とすることであるといっている。

私は前に、宿業を信ずることなしに苦悩よりの解放がないことを述べたが、諸法の空無我、因果無自性の理が信知されれば、宿命とか宿業というものも本来あり得ないことが理解されよう。併し已に宿業を感じ、その業報に善悪すべてをまかせること、そのことがあらゆる執着を離れて、空無我に生きることになるのであるから、宿業と空無我の理とは矛盾するものではないのである。

鴦仇摩羅は、仏陀の空無我の理を聞いても、『入楞伽経』巻6[114]にも云われているように、自心の見解に固執し、虚妄に分別するので、論説も絶えず去来し、心も動揺して止まることがなかったであろう。されば仏陀に、「汝とどまらず」と諭されたのではないであろうか。

併しここで仏陀は、汝は止まれ、止まれと叫んでいるが、「われはすでに止まっている」[3]と仰せられているのでありますが、これは『無上依経』巻上[115]に説かれているように、一切の外道は我見に邪執しているが、声聞や縁覚は諸の衆生の中に住し、和合して彼等を利益しようとはしないので、我れは大悲の心で、無我の法を以て、恒に十方の諸の衆生を利益せんとして、三世を過ぎて永遠に留住するのだ、とのみ心ではなかったであろうか。

この「われはすでに止まっている」とのみ心がいただかれてみると、今まで追いついたかと思えば捨てて去られ、また追いついたかと思えば捨てて去られた仏陀の心は、或はまた“捨”を行ぜられていたのではあるまいか。

『宝積経』巻41[116]には、時・非時の捨あることを説き、声聞乗の趣に正しく決定せるに於て、応に捨を起すべしとあって、鴦仇摩羅の追いついたと思う心に捨を行ぜられたのであり、同経巻87[98]でいう、世情に溺れずに、能く世間を救う“捨”の心に住していたのである。『智度論』巻20[117]にも、「行者は慈・喜の心を行じて或る時は貪愛の心を生じ、悲心を行じて或る時は憂愁の心生ず。この貪愛と憂とによって心乱るれば、慈心を以て衆生をして楽ならしめんと欲しても楽を得しむること能わず。悲心を以て苦を離れしめんと欲すれども、また苦を離るることを得しむること能わず、喜心も大喜を得しむること能わず。これはただ憶想のみにして未だ実事あらず」されば捨心を行ずるとは、衆生を捨てるのではなく、常に衆生を念じて、ただこの三種の心のみを捨するのだという。

『賢愚経』巻11[1]には、ことさらに王の前で一児を争う二母の話がある。王は二人の女を呼び出し「各々その子の手をひき、勝った者をその母としよう」と告げた。その実の母でない者は、児の手を力一杯ひいて損傷おかまいなし。生みの母は、痛みに耐えかねて泣き叫ぶわが子に、思わずその手を離してしまった。その時王はその真偽に鑑み、力一杯ひき寄せた女に対して、「本当に汝の子ではない」と云い渡したという。またこれと同じような話が『旧約聖書』列王紀上3[118]にも記されている。

人間の愛は憎しみに変る。愛着、愛執を捨てたところに、却って真実の愛が現われているものであることは、洋の東西、宗教の如何を問わず、真実であることが肯かれよう。また『分別功徳論』巻3[67]によると、捨とは即ち無主施なりとあり、私が救ってやるのだというその意識さえ持たないで、俱に涅槃に到る施であるという。今、仏陀はここで彼にまた無主施を行ぜられたものであろうか。

かつて私が恩師故東野安陸老師に師事した当初、何を質問しても師は「いまにわかるようになる

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

よ」としか仰せられなかった。考えてみるまでもなく、私は教えられたらわかるような存在であったのであろうか。若し教えられてわかるものなら、親鸞聖人も、弟子一人も持たず、[45]とは仰せられなかったであろう。師はまたしばしば「理窟を聞いたり、おぼえたりして何になる」と厳しくいましめられた。理窟を執擁に聞きたがるのは、それを己れの顚倒せる分別に合わせて理解しようとする妄執からであることを知って、それを恐れ、捨を行ぜられたのであろう。

併し、仏陀も老師も、鴦仇摩羅を、そして私を捨てたのでないことは勿論で、追いつこう、或は追いついて安心しようとするその心の執わりを破り、却って迎えとらんと留住していたのであります。

それまでの鴦仇摩羅は、彼を温かく迎え入れる者もなかったことに悲歎して、千人を相手にまわして戦うといった、破壊的攻撃的反社会的行動に走ってしまったことであろう。而して母だけはと思っていたその愛情も、その体不実で、今は彼を恐れてさえいる。然るに種々に善巧方便して、彼を救わんものと、永いこと待っていられた仏陀のみ心にふれた鴦仇摩羅は、いま自己を深く省み、創造的な自己を完成する道を歩みはじめることになったことであろう。

《初　　生》

一切の者たちから見捨てられたと思っていた鴦仇摩羅は、今、仏だけは迎え入れんとして待っていて下さったとの感激に、仏を礼し自ら帰依し、身を投げ出して過ちを悔い、自ら責め、出家を求めたという。

『金光明経』讃嘆品[119]には、仏を礼し讃嘆することによって身口意の業が清浄になることが説かれており、彼は今、仏を礼して、身口意の三業が清浄になったことであろう。また『大乗集菩薩学論』[120]には、これが清浄にせられたるときは、罪と煩悩を清むる懺悔となるという。田辺元[121]は、随順的絶望に於て、自己を放棄することが懺悔だといっているが、ここで身を投げ出したということもまた懺悔を意味していよう。仏種の萌芽も煩悩の雑草に覆われていた時には、成長しなかったであろうが、いま彼は、仏を礼し、讃嘆し、懺悔したことによって、有執の穢濁、煩悩は浄化せられ、『大乗集菩薩学論』にいうように、仏心、仏種を適正に受用して、その萌芽をみたのではないであろうか。されば仏陀は、彼に仏種の萌芽をみ、「聖法の中に於て初めて生る」と仰せられたのであろう。

而して『大集会正法経』巻3[122]には、一切の生者に久生と初生の二種あることを説き、久生というのは、塵垢のしみついて、いくら苦労して洗っても清浄にならない故衣を着ている者のように、清浄にならざる煩悩に汚染されて、六趣の中に永く展転して苦を受けている衆生のことであり、彼等はそれになじんで六趣を厭い離れて解脱を求めようともしないという。また初生とは、身体を洗い、新調してまだ塵垢のついてない心地よい衣服を着たように、煩悩・妄念に汚染されることもない清浄のものを云うのであるが、併し初生の者と雖も、久しく仏道を修習し、菩薩の法には昔に於てすでに通達したものであるという。

然れば『成実論』巻10[123]にいうように、人間などの子どもが生れるごときを初生というのではないのである。それは過去久遠の宿業、久生のけがれを持って生れてきたのであり、未だそれを断

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

じ尽くしておらず、むしろそれに駆使されながら、それを自覚することもないからである。

而してこの初生の者は、一切の分別を超えて、寂然として真の安らぎに住し、過去の業報を受けず、我執なく、苦受の想なく、仏の如く生じ、仏の如く滅に入り、一切の煩悩を断じ、梵行具足し、大総特を得、一切出世の善法を円満し、種々大悲の方便を以て、大法蘊を説いて、六趣の中に於て、一切受苦の衆生を救済し、一切の衆生を皆解脱せしむるという。[122]

ここで、一切の分別を超えて、とあるが、『大方広如来秘密蔵経』巻下[108]にも、たとえば須弥山を覆って燃えさかっていた火も、やがては自然に滅する如く、如何に熾烈なる煩悩も、不実妄想の分別の心を更におこさず、また更に固執しなければ、当に漸々に滅するであろうといい、また「十悪道ももし堅着せずんば名けて不犯となす。一切の煩悩もし堅着せずんば、我れ無犯と説く」と仰せられる。

また『大荘厳法門経』巻上[124]には、煩悩もその体不実で、これらの顚倒の妄執が無ければ滅尽し、また種子の如く能く菩提心を生じ、満足するという。

されば、かくして鴦仇摩羅は出家を求め、道人たるを得た彼に対して、仏陀は“汝は生れてより以来、初めより殺生をなさず”と仰せられたものであろう。

『随相論』[125]には、「時を失するの故に、余縁を具すと雖も則ち芽を生ぜず。春まけば則ち生じ、冬には則ち生ぜざるが如し。時を失するに因って、また能く果を生ぜず。鴦仇摩羅は無明に因りて二千の命を断ち、地獄に堕つべきも、而も現身に阿羅漢を成ずるを得たり。先づ所作す悪は時差を以ての故に、余縁を具すと雖もまた果を生ずるを得ず」という。

阿羅漢（Arhān）とは、応供即ち受くべき価値をもつ意のArhの変化したものとの意もあるが、また殺賊即ち煩悩の賊Ariと断つ、切るの意hanの合成によって出来たとする意もあるという。即ち煩悩が断たれて阿羅漢を得てみると、罪業もとよりかたちなきものであったことを知るであろう。

すべては転倒の妄想が罪業をつくり、その報をみていたのであるが、今、この過去の邪見を破り、阿羅漢を得た彼には、無明の時犯したところの悪業の果を受けることがない、というのであります。

而して彼が、出家を求めたことについてであるが、『仏所行讃』巻2[126]にもある如く、在家にあれば再び同じ過ちを犯すであろうし、恩愛の心に溺れて、戒・定・慧・解・解脱知見を妨癈するであろう、と考えたからでもあろうか。

《二 種 の 護》

かくして出家が許された鴦仇摩羅を、仏陀は祇洹精舎へ連れて行かれたという。仏陀は彼に仏戒を持たせようとしたのであろうか、また仲間として温かく迎え入れて、集団所属の願望を満足せしめようとされたのでもあろうか。

『大般涅槃経』巻32[127]には、仏の正法には、内護、所謂禁戒と、外護、すなわち族親眷属の二種の護があるという。

而して『優婆塞戒経』巻6[111]には、戒に世戒と第一義戒の二種類があって、三宝に帰依して受けるのが第一義戒（仏戒）であるという。

如何に世間の集団だからといっても、そこには自から制約（世戒）があり、その約束ごとが守られなければ、その仲間に居ることはできまい。併しこの約束ごとも、人を仲間外れにするために決

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

められたものではなく、本来いつまでも仲良くしたいという願望から生じたものではあるまいか。然るに世俗の集団の約束ごとは何時どのように変るかわからないので、そこでは永遠の安らぎを得ることができない。そもそもこの世間の世には、破壊とか遷流の義があるといわれ、然れば経[108]にも、世戒は不安定なもので、それを守ってもその功徳は仮りのものであり、またそれを破る罪も不安定であり、仮りのものであるから、重い罪を受けないが、第一義戒を受けるということは、それによって諸の悪業を破壊することができる重大なものであるという。

而して『梵網経』[128]には、衆生仏戒を受くれば即ち諸仏の位に入り、位大覚に同うじおわれば真に是れ諸仏の子なりとあり、『維摩経』[129]には、仏戒を持つということは、罪性は内に在らず外に在らず中間に在らず、畢竟空であることを知ることであるという。されば仏戒を受けしめんとするのも、結局は諸仏の仲間として、その子として迎え入れ、罪性の畢竟空なることを知らしめて、真実永遠の安らぎを得しめんとのみ心からではなかったであろうか。

されば時に仏戒を破らねばならぬことのあった時、それが真実その者のためになることであれば、あえてそれを許していることでも理解できよう。すなわち『分別功徳論』巻4[130]によると、優波離比丘が病気になり、医師に酒5升を飲めば治ゆすると云われ、戒を破ることの是非を問うた時、仏陀は、我が所制の法は病者を除くと仰せられて、酒を与えられたという。

また族親眷属についてであるが、Theis や Simonsen[52]は、不良な家庭は良い施設にまさるといっている。たとえどのように残酷な親でも、親はたえずなんらかの形で子どもに尽くしているから、不良な家庭環境から良い環境の施設へと救済しても、その努力は大抵むだに終るものだという。

また Berkson[131]は、アメリカ全土の25歳から74歳までの性別年齢別死亡率（1949～1951年）から、全死因について、配偶者のある者の死亡率が最低で、概していえば離別者に於て最高であり、独身者と死別がほぼその中間を占めていることを指滴している。自殺者については勿論肯づけないこともないのだが、この傾向は肺癌に於ても顕著で、而も紙巻タバコの1日の喫煙量に比例して肺癌の死亡率は高いことが知られているが、Haenzel や Hammond が報告しているところによれば、紙巻タバコの喫煙量は独身の人々よりも、むしろ配偶者のある人々に於て多いといわれている。

これについて、時に独身者は充実度に於いて劣る性生活を送っている場合があり、また禁欲の背後には、しばしば抑圧が働き、これが原因で心身症を発生させることさえあるからであろうと推測している者もある。また若い時代は独身を通すことも容易であろうが、独身であることは社会の枠外に当人を孤立させやすく、その為、傷つきやすいのも事実であるという。[138]

これらのことは、族親眷属のいることが、心身にどれほど好影響を及ぼしているかということを指差してはいないだろうか。

釈尊も、『増壱阿含経』巻26[132]によると、親族の蔭は涼しい、とも、また『四分律』巻35[52]によると、親里の蔭下に在りて楽しむ、とも仰せられている。また『涅槃経』巻32[127]にも、「若し仏如来化身を受けなば、則ち外護無からん。是の故に如来は化身を受けず」と仰せられる。

仏陀は、この世の集団で最も依り処となるものは、族親眷属であると仰せられているが、これも俗世の習いで流離王に壊滅せられるのを、遂に防ぐことは出来なかった。

『大無量寿経』巻下[133]にも、独生独死独去独来と説き、『宝積経』巻82[134]にも、父母妻子はそれぞれの業報による所生であり、また我れも自分の業によって生れたものであるという。されば『華厳経』巻35[135]や『往生要集』[136]には、すべての者は孤独無依であって、救護するものなしと

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

ある。

また『仏所行讃』巻2[126]には、如何に愛し合った親族も、やがて存亡各々路を異にすれば、夢のようにはかないものであるという。まことに「夢中の聚散の如きものに、我が親を計るべからず。たとえば春生ぜし樹の漸く長ぜし枝葉茂り、秋霜ありて遂に零落す。同体にしてなお分離す。況んや人暫く合会し、親戚あに常に俱ならんや」であります。

また『遺教経』[137]には、眷属知己等に心をひかれれば、そのために苦悩も多く、自らそのために没在して、出離することができないぞといましめてさえいる。

然るに人は真に迎え入れてくれる仲間を求めて止むことがなく、この世では、その理想に近い仲間、集団が家族なのである。併し、何かの理由でその家族間の協調が乱れ、各人に期待されている役割が遂行されないという事態がおきると、家庭は混乱し、家族員同士の意志の疎通をさまたげ、誤解や敵意を強め、極端になると、しばしば親子の間でさえ暴力沙汰にまで発展することさえある。されば時にそれを憎悪し、嫌い捨てる、即ち家出する者もあろう。[138]

『涅槃経』巻19[139]や『根本説一切有部毘奈耶破僧事』巻16[140]などによると、アジャセは、過去の親の仕打ちを怨み、憤り、父ビンバシャラ王を惨殺せしめんとさえしたという。然るにその彼が、わが子に対する憐愍の情を通して、わが身にもかけられていたであろう親心を、天来の声として聞いたのである。

この親心こそ濁世に汚がされることなき永遠真実のものであり、これはそのまま仏心そのものであったのである。さればまた族親眷属、家庭は、この親心、仏心を聞く場でもあったことであろう。

またこの仏心を得たその弟子たちも、その変ることなき仁慈の心で、鴦仇摩羅を仲間として迎え入れてくれることであろう。

されば仏陀は、その前で罪を悔いた彼を祇洹精舎へ連れて行かれたのではあるまいか。この祇洹精舎について『智度論』巻3[141]には、精舎は坐禅の人に宜しく、安穏なる処であり、多くの仏弟子たちがここに住していたとあり、『分別功徳論』巻2[67]には、其処には特殊な神験があって、衆僧が講堂に集まる時には、何時も数千のサルや諸の鳥たちが左右に来集して、静かに観聴したといい、これは全く仁慈のしからしむるところであると説かれている。

されば、彼の造悪が、人間の基本的慾求である集団所属の願望が満たされなかったことによることを洞察した仏陀が、虚仮なる人間集団への所属の妄執を断たしめ、仏陀をはじめとして、多くの迎え容れてくれる真実仁慈の者のあることを彼自身にさとらしめ、まづ集団所属の基本的慾求を満足せしめたことであろう。

かくしてこの願望がかなえられた彼は、建設的な努力、即ち下化衆生の行に変ってゆくのでありますが、それは、その後、舎衛城の城門の裏で難産に苦しむ婦女を助けていることでも知ることができよう。

また、やがて城内に入った彼は、彼にその肉親を殺害されたり、或は怨みを持つ人々に、刀杖や瓦石で滅多打ちにされ、衣服は裂かれ、鉢盂もまた破壊され、城外に追い出されたのでありますが、それを怨むどころか、仏陀のみ許に帰った彼は、自らかかる仕打ちを受けねばならぬ自分の業因について語っています。[3]

かくして彼は、彼を温かく迎え容れてくれるよき仲間を得たればこそ、彼の犯した罪の報い、宿業を甘受し、世俗の穢濁に染まらず、四面楚歌の世俗の孤独や迫害の中にも没することなく、上求

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

菩提、下化衆生を生きることを得たことであろう。

《宿　　善》

『賢愚経』巻11[1]には、「行には必ず報あり。今、この比丘房中に在り、地獄の火、毛孔より出づ。極めて患、苦痛なり。酸切言いがたし」とあり、仏陀が戸の鍵を持って、鴦仇摩羅の罪ゆえに入れられたその房の鍵孔に入れしめたところ、それが融けて消滅したとも云われている。『阿毘達磨順正理論』巻41[142]にも、殺の加行と果を満たすことによって、殺の業道が成就することが説かれてあり、されば鴦仇摩羅の殺の業道は成就しているのであるが、その罪業をひかずに阿羅漢果を得たことについて、仏陀は阿難の問に応えて、彼は迦葉仏の時、一比丘となり、僧の為に執事し、彼の世の時、出家持戒し、僧事を営むに因り、願を立てた宿善によると云っている。

また『智度論』巻24[143]には、「仏はこの人は先の因（宿善）の力大なり、この人は今の縁の力大なり。この人は縛を欲して解を得、この人は解を欲して縛を得と知りたまう。たとえば、鴦仇摩羅が母を殺し、仏を害せんと欲して、解脱を得るが如く、一比丘の四禅を得たるも、増上慢の故にかえって地獄に入るが如し」とあり、また『天台玄義』にも、「如来の洞達は十法底を究め、十方辺を尽くし、明に衆生の種、非種、芽、未芽、熟、不熟、度脱す可く、度脱すべからざるを識る。如実に之を知り、錯謬有ること無し。鴦仇摩羅は是れ悪人と雖も、実性相い熟して即時に度を得、四禅比丘はこれ善人なりと雖も、悪性相い熟して即ち度に堪えず」[144]といい、『仏説首楞厳三昧経』巻下[145]には、人は則ち応に妄りに他の人々を称量すべからず、とあり、もし妄りに他の人々を称量すれば、軽慢の心を起して、却って自ら傷つくことになるからだという。さればまた諸の衆生に於て、応に仏の想を生ずべしといい、何故ならいづれがひそかに仏になる授記を受けているか、如来以外にはわからないからだという。

然れば鴦仇摩羅は宿善の故にすでに授記されており、今その実性が熟してきたのであろうか。

《浄土往生の思想》

仏陀は涅槃に入られて、時代は末世、その仁慈の仏弟子の集団はすでに無く、あるのはあてにならぬ野次馬的集団ばかりである。この時代にこそ生きているのが、弥陀の本願念仏の教えであり、浄土往生の思想であろう。

而して『大乗広百論釈論』巻５[103]には、「本願の行もまた顚倒に非ず。能く諸法の実義を了知するを以て、一切の法に於て執着するところ無く、能く発心して無上の妙果を求め、有情を利楽すと雖も、然も幻師の諸の幻事を起すに似て、すべて所執無し」とある。

而して『教行信証』行巻[146),147)]には、『十住毘婆沙論』を引用して、般舟三昧の父、即ち衆生の称える念仏と、大悲無生の母、すなわち本願の廻向としての信心より一切のもろもろの如来の初生ありと説かれ、この初生の菩薩、信心の行者は三悪道の汚染を受けず、分別して生ずる繫縛を断ち、動揺なく、また退転せず、大悲心を得て、安楽浄土に生れんとの意を発し、同時に利他の大行たる念仏を成ずるのであるという。

また念仏を称えることについて、称仏六字、即嘆仏、即懺悔、即発願廻向、一切善根荘厳浄土[148)]

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

といわれ、念仏を称えることは、そのまま嘆仏となり、身口意の三業は清浄となって、仏心を適正に受用、有執の穢濁が浄化消滅（懺悔）され、ここに仏種の萌芽、初生（発願廻向）があるのであります。また、一切善根荘厳浄土について、『智度論』巻45[149]には、人が旅をする時、資糧、器杖を身につけることだといい、『大乗荘厳経論』[150]には、如実にその義を明らかに開示することだとある。されば往生浄土の所謂旅に、弥陀の久しきにわたる修行によって得たその福徳智慧が行者の身についているので、三悪道の汚悪にも染まらず、能く浄土の徳を説いて、この功徳を一切の衆生に与うることになるでありましょう。

また嘆仏について、『智度論』巻30[151]には、如実に仏を讃嘆できるものは、ただ仏一人のみであるといい、親鸞聖人によれば、称仏六字即嘆仏について、南無阿弥陀仏をとなふるは仏をほめたてまつるになると也という。されば念仏の行者は諸仏の位に等しいものということになり、このことは、穢濁の世、孤独無依の世に在りながら、すでに諸仏に迎え容れられていたことを意味していよう。ここに所謂建設的な努力、往生浄土の精進が、自然になされるのではないであろうか。

これもまた宿善の開発による[152]とのことであるから、わがはからいをさしはさむべきでないことは勿論である。

而してこの浄土は勿論「無生の生」[153]であるから、空・無我の理に外れるものではなく、また諸の上善人が倶に一処に会して待っていて下さる世界でもあり、むしろ人間の一番の弱点である集団所属の願望を満足せしめながら、究竟の目的である空・無我に導びき入れるものでありましょう。

《総　　括》

鴦仇摩羅は、人間の基本的欲求である集団所属の願望が絶たれて、反社会的行動に走ってしまった。併し真に殺害すべきは、あらゆる愛執、愛着の心であり、わが身に対する貪愛の心をも断ち得てこそ無上正真の道に到り、永遠の安らぎを得ることができるのである。

人はその環境によっても影響を受けるが、また人にはそれぞれ宿命的な生れつきがあり、これは結局自分自身の無明によるものであり、それから逃れようとして却って苦悩せねばならぬのであるが、如来智の所照において、すべてを己が宿業と深く信じ、善悪すべてをその業報にさしまかせるとき、はじめてその繫縛から解放されるのである。

併し、考えてみると、それによって苦悩せねばならぬ人生の出来事すべては、仏の神通であり、所謂ご催促ではなかったであろうか。

而してこの神通を通して仏は空・無我を説いているのであり、あらゆる執着を断つべきことを教えているのである。

然るに世俗の既成概念に固執して、この理が説かれると、却って大いに動揺して、なかなか信じようとしない。

そもそも仏が三世を説き、因縁因果の道理を説き、宿業を説くのは、世俗の習慣に従ったまでで、本来その実体があるのではなく、第一義、空・無我に導びき入れるための方便であったのである。また、因果を信じ、宿業を信じて、善悪すべてをその業報にまかせること、そのことが空・無我に生きることなのである。

然るに、空といえば悪しく空に執するものに対しては、仏は因果を説くこともあるのである。そ

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

れは、因果を信じているものは、世俗の善根をあえて断滅しようとはしないが、悪しく空見に執するものは、ただに涅槃に背くばかりでなく、世俗の善根をも断滅するからである。

而して空・無我の理を誤解する者の多い今日、なおこの理を説くのは、これをさとる以外に真の心の安らぎがないからである。

されば、仏は、この理を信ぜず、未だ救われざるもののために、三世を過ぎて留住せんと誓われているのであります。

この世のあらゆるものはあてにならぬが、仏だけは、あらゆるものを空・無我に導びき入れて、安らぎを得しめようと待っていたのである。この仏心がいただかれたとき、一切の煩悩の繫縛から解かれて、聖法の中に初めて生ずるを得るのであります。

また仏の正法には二種の護ありといい、その禁戒をまもらしむるのも、仏及び仏弟子の仲間に迎え入れんがためであり、そして結局は空・無我に生かしめんとの仏のみ心からであった。また世俗の族親眷属も、その迎え入れていた親心、仏心に気づかしてくれるものであったのである。

世俗の集団は、たとえそれが如何なるものであっても、永続するものはない。然るに仏の、そしてその仁慈の徳に集まった仏弟子の集団は、真実不変のものであろう。これに帰依してはじめて、真に集団所属の欲求が満足せしめられて、人は如何なるところに於ても、空・無我に生き、建設的な、上求菩提・下化衆生の行に精進することになろう。

また浄土往生の思想も、この集団所属の欲求を真に満足せしめながら、結局は空・無我に導びき入れるものでありましょう。

而して、これもまた宿善によるものであろうから、わがはからうべきことでないことは勿論のことである。

（昭和51年6月23日稿）

主要参考文献

1) 賢愚経巻11：国訳，本7，310;329.
2) 出曜経巻17；巻19：国訳，本10，343;368.
3) 増壱阿含経巻31：国訳，阿9，153.
4) 池見酉次郎編：医学における暗示療法，金原出版KK，昭41.
5) 提婆菩薩釈楞伽経中外道小乗涅槃論：国訳，論2，389.
6) 雑阿含経巻43：国訳，阿3，355.
7) 成実論巻7：国訳，論3，234.
8) 阿毘達磨順正理論巻33：国訳，毘28，339.
9) Roger Tredgold：ストレスと自己主張，Japan International Medical Tribune, vol. 7, No. 19, メディカルトリビューン日本支社，1974，5.
10) 同上，vol. 7，No. 20.
11) 中本起経巻下：国訳，本6，386.
12) 分別縁起初勝法門経巻上：国訳，経14，186.
13) 出曜経巻30;巻21：国訳，本11，207;24.
14) 増壱阿含経巻37：国訳，阿10，29.
15) 阿毘達磨大毘沙論巻200：国訳，毘17，194.
16) 法句譬喩経巻4：国訳，本11，325.
17) C. E. Moustakas：Loneliness, Prentice-Hall, Inc., Englewood Cliffs, New Jersey, U. S. A. 1961, Translated by K. Yoshinaga.
18) ブーバー：孤独と愛，野口啓祐訳，創文社，昭40.
19) 阿毘達磨大毘婆沙論巻198：国訳，毘17，120.

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

20) 平井信義：母性愛を考える，小児保健研究，32巻３号，日本小児保健協会，1973.
21) 会田雄次：日本人の意識構造，講談社，昭45.
22) 日本霊異記下巻16：日本古典文学大系70，359.
23) 今昔物語巻27：同上25，507.
24) 同 上 29：同上26，189.
25) 宇治拾遺物語：同上27，372;392.
26) 百喩経巻１：国訳，本７，11.
27) 雑宝蔵経巻２：国訳，本１，158.
28) 撰集百縁経巻４;巻５：国訳，本５，146;162.
29) 稲村博：子殺しの精神病理，中外医薬27巻７号，中外製薬KK，1974.
30) 同上27巻２号.
31) 同上27巻１，３，４，５・６，８，９，10，11・12号.
32) 仏説大乗戒経：国訳，律12，289.
33) 宝積経巻44：国訳，宝２，352.
34) 無所有菩薩経巻１：国訳，経２，172.
35) 智度論巻20：国訳，釈２，112.
36) Japan International Medical Tribune. vol.8, No.31, p10, 1975, 7.
37) 中本起経巻上：国訳，本６，356.
38) 廻諍論巻４：国訳，論２，184.
39) 本事経巻４：国訳，経14，340.
40) 大乗本生心地観経巻２;巻３：国訳，経６，181;197.
41) 雑阿含経巻28：国訳，阿２，328.
42) 雑宝蔵経巻７：国訳，本１，255.
43) 宝積経巻105：国訳，宝６，59.
44) 諸経要集巻４：大蔵経27，７，398.
45) 歎異抄第５章：真聖全２，776.
46) 弘道広顕三昧経巻２：国訳，経２，332.
47) 正法眼蔵下巻：岩波書店，昭40.
48) 在家仏教73，51，在家仏教協会，昭35.
49) 雑阿含経巻４：国訳，阿１，82.
50) 生経巻４：国訳，本11，446.
51) 雑阿含経巻48：国訳，阿３，487.
52) J. Bowlby: Maternal care and mental health.（黒田実郎訳）岩崎学術出版社，1973.
53) 涅槃経巻23：国訳，涅２，44.
54) 福蓋正行所集経巻５：国訳，論６，320.
55) 四分律巻35;巻41：国訳，律３，59;214.
56) 十誦律巻21：国訳，律６，20.
57) 根本説一切有部毘奈耶出家事巻４：国訳，律22，347.
58) 古事記上巻：日本古典文学大系１，59.
59) 稲村博：子殺しの精神病理，中外医薬28巻２号.
60) 尊・婆須蜜菩薩所集論巻８：国訳，毘６，340.
61) 大乗本生心地観経巻２;巻３：国訳，経６，181;197.
62) 涅槃経迦葉品：国訳，涅２，267.
63) 宇治拾遺物語：日本古典文学大系27，372;392.
64) 法句譬喩経巻４：国訳，本11，316.
65) ブルフィンチ著，野上弥生子訳：ギリシア・ローマ神話上・下，岩波書店，昭46.
66) 宝積経巻55：国訳，宝３，204.
67) 分別功徳論巻２;巻３：国訳，釈８，178;194.
68) 高津春繁：ギリシア神話，岩波書店，1973.
69) 成実論巻１：国訳，論３，29.
70) 樋口幸吉，橋本鍵一：犯罪，非行の臨床，医学書院，1964.
71) 出曜経巻23;巻29：国訳，本11，60;197.

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

72) 十地経論巻11: 国訳, 釈6, 241.
73) 賢愚経巻9: 国訳, 本7, 266.
74) 六度集経巻6: 国訳, 本6, 255.
75) 過去現在因果経: 国訳, 本4, 19;64;112.
76) 本事経巻1: 国訳, 経14, 276.
77) 六趣輪廻経: 国訳, 経14, 222.
78) 智度論巻24: 国訳, 釈2, 223.
79) 般若燈論巻15: 国訳, 中2, 346.
80) 十地経論巻8: 国訳, 釈6, 175.
81) 阿毘達磨蔵顕宗論巻14: 国訳, 毘23, 270.
82) 大方等大集経巻3: 国訳, 大1, 72.
83) 歎異抄第13章: 真聖全2, 782.
84) 保崎秀夫: 心の科学をめぐって, いずみ21巻1号, いずみ社, 昭49.
85) 平井信義, 田口恒夫他: 児童保健と精神衛生, 光生舘, 昭44.
86) Leo Kanner: Child Psychiatry. (黒丸・牧田訳) 医学書院, 昭39.
87) Peter Michelmore: 小児の情緒障害の早期予防, Modern Medicine of Japan. 朝日新聞社. 1975, 5.
88) 馬場一雄編: 出生前小児の医学, 医学書院, 1968.
89) Medard Boss: Körperliches Kranksein als Folge Seelischer Gleichgewichtsstürungen, Hans Huber, Bern, 1956.
90) 大方等大集経巻32: 国訳, 大2, 304.
91) 宝積経巻55: 国訳, 宝3, 204.
92) 仏説華手経巻10: 国訳, 経13, 249.
93) 瑜伽師地論巻37: 国訳, 瑜3, 1.
94) 大般若波羅蜜多経巻1: 国訳, 般1, 4.
95) 仏性論巻1: 国訳, 瑜11, 279.
96) 僧伽羅刹所集経巻下: 国訳, 本9, 350.
97) 観普賢菩薩行法経: 国訳, 法, 240.
98) 大般若波羅蜜多経巻387: 国訳, 般4, 246.
99) 般若燈論巻11;巻12: 国訳, 中2, 261;268.
100) 大乗広百論釈論巻4;巻5;巻6: 国訳, 中3, 272;303;325.
101) 大日経: 大蔵経講座6, 124. 東方書院, 昭8.
102) 仏説内蔵百宝経: 国訳, 経15, 166.
103) 坐禅三昧経巻下: 国訳, 経4, 320.
104) 大般若波羅蜜多経巻4: 国訳, 般1, 27.
105) 大方広如来秘密蔵経巻下: 国訳, 経12, 134.
106) 宝積経巻87: 国訳, 宝5, 86.
107) 修行道地経巻4: 国訳, 経4, 88.
108) 大乗広百論釈論巻3;巻10: 国訳, 中3, 265;424.
109) 大乗本生心地観経巻4: 国訳, 経6, 219.
110) 般若灯論巻14: 国訳, 中2, 314.
111) 優婆塞戒経巻6: 国訳, 律12, 174;189.
112) 宝積経: 国訳, 宝1, 67.
113) G.W. Allport: The Individual and his Religion. The Macmillan & Co., New York, 1950.
114) 入楞伽経巻6: 国訳, 経7, 189.
115) 無上依経巻上: 国訳, 経6, 130.
116) 宝積経巻41: 国訳, 宝2, 288.
117) 智度論巻20: 国訳, 釈2, 120;125.
118) 旧約聖書列王紀上3: 聖書, 日本聖書協会, 1964.
119) 金光明経讃嘆品: 国訳, 経5, 233.
120) 山口益: 懺悔について, 仏教学セミナー9, 1, 大谷大学仏教学会, 1969.
121) 田辺元: 懺悔道としての哲学, 岩波書店, 昭21.
122) 大集会正法経巻3;巻4: 国訳, 大6, 48;67.

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

123) 成実論巻10：国訳，論３，347.
124) 大荘厳法門経巻上：国訳，経12，86.
125) 随相論：国訳，論４，303.
126) 仏所行讃巻２：国訳，本４，339.
127) 涅槃経巻32：国訳，涅２，246.
128) 梵網経：国訳，律12，334.
129) 維摩経：国訳，経６，329.
130) 分別功徳論巻４：国訳，釈８，222.
131) 小泉明：人間生存の生態学，杏林書院，昭47.
132) 増壱阿含経巻26：国訳，阿９，58.
133) 大無量寿経巻下：真聖全１，32.
134) 宝積経巻82：国訳，宝５，７.
135) 華厳経巻35：国訳，華２，229.
136) 往生要集：真聖全１，731.
137) 遺教経：大蔵経講座５，332. 東方書院.
138) 石川;森沢編：健康哲学のすすめ，有斐閣，昭50.
139) 涅槃経巻19：国訳，涅１，384.
140) 根本説一切有部毘奈耶破僧事巻16：国訳，律24，305.
141) 智度論巻３：国訳，釈１，84.
142) 阿毘達磨順正理論巻41：国訳，毘29，65.
143) 智度論巻24：国訳，釈２，220.
144) 新編真宗大系12，140.
145) 首楞厳三昧経巻下：国訳，経７，36;39.
146) 教行信証行巻：真聖全２，８;15;22;24.
147) 遠山諦観：教行信証精解，新潮社，昭13.
148) 尊号真像銘文（広本）：真聖全２，587.
149) 智度論巻45：国訳，釈３，297.
150) 大乗荘厳経論：国訳，瑜12，189.
151) 智度論巻30：国訳，釈２，372.
152) 御文１帖目第４通：真聖全３，406.
153) 往生論註巻下：真聖全１，327.

NII-Electronic Library Service